

# OB会報

湘南サッカー部 OB会報 第31号



## 長編 スペイン遠征道中日記

### 純と愛馬による

40回生 山田 仁夫

思いがけずも鈴木中先生の依頼を受け、相羽君と共に湘南高校スペイン遠征に帯同することとなった。驚きつつもせめてもの中さんへの恩返しができる嬉しくもあった。ましてや愛馬と一緒に、頼もしい。

約半世紀も歳の離れた今の湘南高校生が最初に行った機上での奇行は、いきなり始めた勉強だ。さすがと思いつつも今の高校生の生き様に同情感すら覚えた。

もちろん携帯のゲームに熱中する生徒も何人かいた。但しそれ以降の日程で勉強している姿は見たことが無い。それは救いだ。

さてその日の夜マドリッドに着く。さっそく私は愛馬を伴って夜の街へ繰り出した。背格好、顔つき、振る舞いに欧米に見る違和感が無い。スペインは我々日本人にとって足が地に着きやすい場所だ。ちょっと店定めをしてからボールに入る。三十半ばも過ぎた女であろうか、ボールの小太りの女はよく働く。あっけらかんと明るく尚且つ

良く手も動く。日本の女性とは質の違う前向きさと、隠しの無いエネルギーだ。人を探らないひたむきさが心地よい。と思っていたらいきなり頼んでもいない、サンドバックのようにぶる下がった生ハムをこそぎだし、にこやかに差し出す。不安になった。会計は驚く程安く、スペインの一日目はお気に入りの眠りとなった。

二日目はマドリッド見物から始まる。早朝よりリアルマドリッドの本拠地ベルナベウスタジアムを訪れた。これはとても羨ましかった。スタジアムそのものではなく、もし私自身が高校生の時代にこの光景を味わったならば、「ここに立ってみたい」「プレーしてみたい」と、何と大きな夢を持ち得たことであろうかと。シーンと静まり返ったスタジアムが、尚更あの歓声と熱気を想起させ、早朝の冷気と相まってよりゾクゾク感ワクワク感を立ちのぼらせていた。どこまで計算された遠征プランかは知らないが、旅の入り口の動機づけとしてはすばらしい企画だ。ちなみに

高校生達は出口近くのショップにくぎづけ。大きな袋を下げて出て来る生徒も何人かいた。その後スペイン広場等の市内観光をするが、とにかく町並み、そして建築物がすばらしい。石造りの古い町並みに突如出現す奇抜なデザイナーの近代ビルも不思議に溶け合い、スペイン人の美意識の根底を見る思いがした。目が痛くなるような日本の町並みとの落差を高校生達も感じたことであろう。次の時代に生かして欲しい。

ところで私の愛馬だが、途中ブラッド美術館（これはすばらしい）も足早に通り過ぎ、さっそく土産買いに走る。まずは孫のフラメンコの衣装。衣装屋を探すと思いきや、いきなり思いつきりの土産物屋に入り、十羽一絡げのベッタンのコの吊るしを取り出し「これでいいよね！」と言って買う。今度はその土産物屋のブルーのポリ袋を下げ、ロエベという高級バック店に入る。地元の人でさえある一部の人でしか足を踏み入れないブティックにポリ袋を下げた。私はやや離れて、バックかと思いきや小銭入れを物色する愛馬、そしてそれを奇妙な目で見詰める店員達を眺めながら、思わず苦笑した。それに呼応するように店員達も吹出し、親切なことに買った小銭入れを大きな口エベの紙袋に入れてくれた。後で解かったこ

のだが、ロエベはルイ・ヴィトンやカルティエなどより格上の王室御用達の店であった。

その日の夜は、いよいよリーガエスバニョーラの観戦だ。マドリッド郊外の高い丘の上に建つ競技場。そこはもう既にサポーターするチームのユニフォームとフラッグ、歩道に立ち並ぶグッズやサッカー誌を販売する屋台、ボールにたむろする人々に彩られた、色彩の違いこそあれ明らかに祭りのざわめきだ。やはりその歴史の違いであろうか、それぞれの土地或いは都市国家と云うべきか、争いごとも含めた都市間の長い生い立ちの上にゲーム、否祭りとして成立してきたサッカーというものを見る思いであった。さて試合の方はやや盛り上がり欠けたゲームであったが、一人目に付いたプレーヤーがいた。髪が薄いというより禿げ上がった、30半ば過ぎたと思われるMFだ。足元の上手さはさることながら、とにかく良く走る。ボールを拾ってはつなぎ、体を捨てては相手の攻撃を潰し、中盤を精力的に動き回っていた。真に献身的であった。何年間、プロのスペインリーグでプレーをし続けてきたのだろうか。名前も確認しなかったが、スペインサッカーの懐の広さと深さを感じさせたプレーヤーだった。スタープレーヤーを夢見る

サッカー少年達も、無意識の中でこのようなプレーをも、残像として脳裏に焼き付けながら、成長していく環境が今のスペインサッカーの根底に有るような気がした。スペインの夜は遅い。ようやく8時ごろになって日没を迎える。スタンドからマドリッドの夕闇、そして夜景を望みながら足元のサッカーを同時に楽しむ異国情緒たっぷりなサッカー観戦であった。

やはりその夜も、昨日のボールへ行き、普段酒を口にしない愛馬がやたらとはしゃぎ回った、マドリッド最後の夜だった。

いよいよ三日目。今回の遠征の目的地、ビルバオへ向かう。6時間をかけたバス移動だ。ともかく景色が美しい。西洋かぶれした昭和初期の歌や随筆等では聞き慣れたが、日本には「丘」というものが無いということが良くわかった。正に、私、鈍と愛馬が彷徨った「丘」がそこには有った。人の姿も家をも暫く見ることの無い乾燥した大地に、灌木と草原を纏った様々な個性を主張する丘々を縫うようにバスは走る。アメリカ西部を思わせるような山岳地帯を抜けるとバスク州だ。ビルバオはもうすぐ。高校時代に地理で習った鉄の町、いきなり目を奪ったのは鉄錆で造られたランドマークともいえる

建造物だ。クールでカッコいい！宿舎は市の体育施設、ファドゥーラでの合宿だ。いよいよスペインでのサッカーが始まる。

このファドゥーラを拠点に連日の三日間、A・B・Cと3チームに別れた、それぞれ別チーム、別会場での交歓試合だ。コディネーターの苦勞の賜物だ。私はAチームに同行したが、その中で二日目、バスクを代表する（今年のUEFA準優勝）アスレティック・ビルバオ・ユースとの1日を紹介しよう。

前日の初試合。気持ちも体も前乗りで、やや乱戦気味に引き分けた翌朝。全員で地下鉄移動、ビルバオの中心地へ。生徒達皆はA・B・I・L・B・A・Oの本拠地、サンマメス競技場へ。例の私と愛馬は旧市街地へと向かった。この街も美しい。私の一番気に入った光景は、一本のストリート。一方の通りの果てには、石造りの連なるビル越しの中空に浮かぶ、日本では飯盛山とも呼びそうな緑の丘。又、一方の果てには眩いばかりに異彩を放つ、まるでブリキで造られたような、美術館。この国、いや、この国の人は面白い。この光景はきっと、市民の賛同を得て造られたものである。4日もいると、そんな気がしてくる。

さて、午後4時から試合だ。場所は郊外のレサマ村。丘陵地に有るこのクラ

ブからは大地の丘と畑であろうか。所々に顔を出す赤茶けた土の色以外、一面の緑に埋まっている。丘を切り取った6面の天然、及び人工芝のグラウンド。そして各々に、シャワーとトイレを備えたドレスルーム。これが幾つ有ったのだろうか。

おそらく、10〜12部屋くらい有ったろう。それぞれのカテゴリーで利用するらしく、女の子達ともすれ違う。会えば皆、オー、ラ、だ。そして、清潔感の有るボールとも思えるクラブハウス。我々にとっては羨ましい限りのこの環境は、経済力の違いではなく、人々にとつてのサッカーへの考え方、成り立ち方の違いであろう。

さあ、ゲームが始まる。ここからは、まず小林先生（監督）の試合メモから紹介しよう。

立ち上がり、積極的に奮いに行き、リズムをとり何度かシュートを放つが、決定機とはならない。

経過と共にアングルとタイミングを取られて、走らされる展開となり、DFラインを低めにせざるを得なくなる。

そんな中、右サイドの1対1を破られ、グラウンダーのクロスに3人が入って来る形で、ファアのDF前に足を合わせられ、ポストの内側を叩いてゴールへ転がり0-1。

しかし、徐々に慣れてきて、サイドを何度か突破して、数度、良い形でシュートを打つが、相手DFが体を投げ出してストップする。

1点を争う拮抗した展開のまま、前半終了。CK、シュート共にほぼ互角となる。

後半、裏への意識を高め、攻撃を展開する。残り15分。FW大内が粘って相手ファウルを誘う。

素早いリスタートから青木がGKとの1対1を制し、1-1とする。

その後FKがポストに当たるなど、危ない場面も有ったが、チャンスも作る展開のまま終了。

充実した表情が示す通り、集中、走力、技術がらしさを出したゲームで引き分けた。

以下、私の印象。

日本の高校生は、上手い。過去は4-0、5-0等で敗れていたらしいが、十分?対等に戦っていた。但し、その中味に関して私が感じたことを以下に記す。

我々がスペインサッカーから受け取る勝手な印象とは違って、とにかく基本がしっかりしている。地に付いた足元のさばき、ボールをもらう前の相手を揺さぶる為の逆への鋭く大きな走り。そして直後のワン・ツーなど、あくまで

もチームの戦術から必要とされる局地での基本プレーが、しっかりと叩き込まれている。もちろん、ディフェンスも然りで、足元には強く、背後には堅く、やたらのゾーンなどは引かず相手には甘くボールを持たせない攻めのディフェンスをしていく。全て足が地に付いたプレーだ。決して目を奪うような派手なプレーはしない。これは、ビルバオというチームのユースだからかも知れない。何しろ聞いたところによると、ビルバオはUEFAリーグ戦でマンツーマンをひいていたらしい。この時代でだ。それを聞いて何か、ディフェンス上がりの私は、このチームが好きになった。

日本の子供達のレベルは確かに上がった。然しながらそのプレーぶりは日本人の昔から大好きな「上手い」というプレーを皆が追っているような気がする。観客も、親も、コーチもだ。強く、早く、上手く、なれないものだろうか?現在、欧州リーグで活躍する日本人プレーヤーも数が増えた。あの激しい欧州のディフェンダーに採まれ、世界に通用するプレーヤーへと成長しつつある者もいる。やはり日本に於いては、ディフェンダーの育成が急務だ。これなくして世界の一流国への仲間入りは有り得ない。

さて、翌日も夕方よりデリオという

村で、交流試合が有ったが、そのスタンドでは地元のユニフォームを着た子供達、その母、そして酒を片手に観戦する大人達等、様々な人が寄り合い、村の交流の場としてのサッカークラブの在り方が人々に優しく又、とても微笑ましいものに映った。一方、昼の時間に行われた学校交流。これはこの遠征にあって実に意義深いもので、今後とも、是非続けて欲しい企画だ。交流校、ガストゥルエタ。港の見渡せる丘の上、おそらくこの近辺で最も美しいと思われる台地に建つ学び舎だ。丘の段差を利用して学舎、グラウンド、体育館、等がその景観を壊さぬよう、小ぎれいに配置されている。ビルバオのエリート達の集う名門校だ。正に、その雰囲気と違わぬ生徒達に迎えられ、体育館でのバスケのパフォーマンス、事務総長の歓迎、そして講堂での対話集会へと続いた。両校4名づつの代表による英語を介しての壇上での対話だ。やはり、彼らからは日本の震災についての質問が続いたが、果たして的確な答えが返せたのだろうか?やはり日本の生徒達の英語力、そしてこの対話集会への準備が問われた時間であった。

その後、両校生徒、入り混じっての昼食会が、近くのレストランで催され、少々照れながらも、次第に会話も溶け

込み彼らの顔に高校生らしさが戻った時に、我々もホッとした。

余談だが、途中中座した私と愛馬が外のテーブルで喫煙していると、近くのテーブルでたむろしていたガストゥルエタ校の4、5人の生徒達がやって来て、珍しかったのだろうか、我々のタバコの外箱が欲しいという。話をしてみても驚いたが彼らは17歳からタバコを吸っているらしい。認められているようだ。エリート校、そしてこちらのブルジョワ層の通う学校、それにタバコか。その違和感も今まで見てきたこのお国柄と重なり、どこか納得してしまふ微笑まじさがそこには有った。でも、30になつたらやめるよ!と笑い残した彼らとの交流の番外編は、等身大の高校生に出会つたお気に入りの時間であった。

食事後にサッカー交流の試合となったが、ここでは、Cチームのみ、他のA、B2チームは別会場、別チームとの対戦に出かけることになった、ここで感じたことであつたが、全員が残つての交流試合であつても良かったのではないかと。先方のクラブのレベルや人数の問題が有つたのかも知れないが、遠征の中の1日を学校交流にたっぷりかけ、同世代の意見の交換や友情を深める時間、そして全員でチームの代表を応援する試合での交流は、高校生の外国遠征に

とって本来核となるべき行事ではないかと思う。湘南高校或いはOB会にとっても、このイベントの位置づけを更に深め、内外に向けて発信或いは報告してゆく価値の有るものだと思う。是非とも今後の遠征の中で継続し広げ深めていって欲しい。一考を！

その日の晩に一泊してスペインを後に、ロンドンへという行程であったが、何とゼネストにぶつかった。予定の飛行機が飛ばない。急遽夜中に生徒達をたたき起こし、バルセロナへの移動となった。(当初の予定はマドリッド) ビルバオからバルセロナへの移動で眠気眼に朦朧と映る光景は、夜明け前のモヤけた空気とも相まって白茶けた荒涼とした白い大地が広がっていた。これは私のスペイン風景の想像のなかには存在していなかった。そして日の出。白と黄ばんだ赤の夜明けだ。

日本では見る事の無い、シュールな日の出だった。クールで美しい。

思いがけずのバルセロナ。スタッフの大変なご苦労に感謝しつつ、我々は嬉しかった。生徒達は早速バルサの本拠地、カンブノウヘ。そして旅のスタッフと私共4人は、あのサグラダ・ファミリアへ出かけた。旅の途中の予期せぬ休息。教会を正面に見る大通りのど真ん中最前列のテーブルで、午後の明るい

日を浴びつつワインをかたむけた休息の時間は、この旅の至極の時間であった。私と愛馬はゆつくりと教会を一周。度肝を抜かれたこの造形物にはシンメトリーという感覚が存在しない。納まりというものを一切拒否した、限りなく終わりの無い非連続性だ。きっとこの大地と国民性の上にしか存在しない建築物であろう。

この化け物の至極の眺め方を紹介しよう。サグラダ・ファミリア正面の公園。そこに有るベンチに横になり、一眠りして、ふと目を覚ます。公園の木々の梢を透かして真つ青な空を背景に湧き上がるこの化け物。これがベストであろう。ふと横を見ると、私と同じ観賞をホームレスのおじさんがしていた。(これは決して皆さんはマネをしないで下さいここは一番危険な観光地らしい。) こうしてスペイン最後の夜をバルセロナで眠り、いよいよ次の遠征地、ロンドンへ向かった。

飛行機に遅れが出、移動バスの中で弁当を食べ試合に向かった。会場は国の施設らしいがスペインの大きな起伏とは違い、こじんまりしたやはり丘陵地に果たして何面有ったろうか全て天然芝のようだ。

A チームの相手は、Barnet F C Youth。どのレベルの選手が出

てきたかは解からないが、Athletic Bilbaoほどの組織力は感じない。しかし、途中交代で出てきた黒人選手には驚かされた。速い。2タッチほどのドリブルで3人位置き去りにされる。ディフェンスを切り裂くということ、正にはこういうことだと実感させられたプレーヤーだ。間違いないように上がってゆく選手であろう。A・b i i b a o の基本を叩き込む育て方。そして、Barnetの個を伸ばし上げる育て方。ユース世代のそれぞれのお手柄、チームカラーによる育て方の違いを考えさせられた試合であった。

今後の日本としても、現在ヨーロッパで武者修行をしている選手が何人もいる。何が通用し何が通用しないかを良く見極め、このユース世代の育成に反映させなければならぬであろう。

遠征の試合は終わった。残るはプレミアリーグの観戦とロンドン観光、そしてB&Sプログラムだ。

(B&SはBrother&Sisterで、現地の日本語を専攻する大学生との英語を介しての街歩き交流である。)

ロンドン郊外は、まるで大きなブリティシユガーデンそのものだ。全ての植物が自然に群れなしそれぞれに境目のない広がりを見せる。川も護岸もされ

ず全てのつながりが自然だ。私の想像を超えた、とても自然を大切にしている美しい国だ。早朝のウインザー城。カフェや土産物屋等が、開店の準備をしている頃の時間だ。背後から石畳を叩く蹄の音。振り向くと、まるで毛糸のブーツでも履いたように脚毛を整えられた馬が二頭。御者を乗せた馬車だ。ウインザー卿ですよ！隣にいたガイドが叫んだ。続けて、エリザベス女王のどんな様です！やや興奮気味のガイドがgood morning SIR！と言うと、極めて穏やかな笑顔が返ってきた。みなさん……！前を歩いていた生徒達が一斉に集まり携帯電話のカメラを向けた。ちよつとヤバイな！と思う

間もなく、ウインザー卿は右手の鞭を軽く挙げ、彼らに向かってにこやかに笑った。馬車の後ろのステップに膝立ちの従者一人を伴っての朝の散策である。

他にガードは誰一人いない。馬に一鞭いれて、あたかも滑走路のように城門前に真つすぐ伸びる、広く長い道の芝生の上を遠ざかっていった。ただそれだけのことなのだが、余りにも見事だったその立ち振る舞いが妙に残ってしまった。品格とは何なんだろう。何が其れを身に付けさせるのだろうか。

果たしてあそこまでの品格が人には必要なのだろうか。貴族とは、王政とは、そして、天皇制とは。

その日の午後には、プレミアリーグ *Ullham vs Norwich* 戦を観戦。私と愛馬はチケットを購入していなかったが、スタジアムまで同行、その近辺 *Putney* を歩いた。多くのサポーターとすれ違いつつ駅に近づくと、騎馬警官、そして怒号にも似た奇声と歌声がそのガラス窓をも、へし割らんとするばかりの酔客で満ちたバブに行き当たると。かつて、フリーガンと呼ばれた、熱狂的サポーターの存在を思い浮かべた。これは、スペインと明らかに違う底無しのエネルギーだ。さすがに中に入ることはためらった。今朝遭遇したウインザー卿の品格、そして、この恐怖心さえ覚えた生々な人間の発露。かつて世界に君臨し、今尚一流国として存在し続ける英国という国の、不思議且つ力強いバランスを感じ取った時間であった。そろそろハーフタイム。売れ残ったチケットでもダフ屋から買おうと、スタジアムに戻って見たがそんな彼らの姿さえ無い。しかたなく脇の通路を歩いていると、そこは競技場スタンドの下。たわみながらその重力と音圧を伝えるスタンド。湧き上がる歓声。覗き見たくてスタンドとスタンドの

隙間を探し回った。無い。背伸びしても見えない。又、移動。そして歓声！「あー見たい！」……と、その時間に何か我々の高校生時代に戻ったような錯覚を覚えた。何とも心地よく、懐かし、甘い刻を味わった。

すばらしい観戦だった。翌日は生徒達の *B & S*。それぞれの *B*、そして *S* と共に分散して、街に繰り出す彼らを送り出し、我々はデパートの店員より無理やり、今一番危険なエリアを聞きだし、そこへ向かった。日曜日の昼下がり、その街は時折一人歩きの老人と、乳母車を押す黒人の女性、普段やり残した休日の家回りの作業をたるそうにこなす人々に出くわすだけの、色の無い白い街だった。この街が何時約変するのか想像もつかない静けさだ。唯一この街で出会った面白い光景は、歩き疲れた我々が喫煙場所に見つけ出した、駅裏の歩道橋から見た下町でのプロレス興業の裏口だ。出番を前にしてのレフリーも含めた打ち合わせの光景と、ひたすらその日のルーティーンを繰り返すレスラーの姿。日常の街のわずかに裏側で、異様なコスチュームと風体のレスラー達の織り成す非日常。イギリス王室、サッカー、そして下町のプロレス。経済活動とは何なのか考えさせられたイギリスで

あった。

その後、我々はロンドン中心部に戻り、旅の最後にとチョッピリ贅沢な食事とイギリス風サービスを受け、旅のシメとした。

*B & S* プログラムを終え集合場所へ戻って来た生徒達も又、何かこの国から感じ取った土産物があったのである。等身大の高校生の顔に戻り、ロンドンの町を背景に妙につややかな顔に見えたのは、私だけだったのであるのか！

そして翌日、スペイン、イギリスと渡り歩いた11日間の遠征を終え、帰国の途に着いた。

この湘南高校サッカー部のスペイン遠征。他校には無い又他校では出来ないイベントであろう。あくまでも湘南高校サイド、そして父母、更にサッカー部OB会の理解と協力の上に成り立っている。感謝し、又多くを心と体に刻み込んで欲しい。かけがえのない経験だ。

彼らはサッカー大国であるスペイン・イギリスの同世代のプレーヤーと体を合わせ、肌で感じ取ったサッカーを手にしたのだ。彼らはきつと、今現在欧州リーグで活躍している日本人プレーヤーの、そのプレーぶりやそしてその心持ちも、少しは理解できる糸口を掴み

取ったことであろう。又、この高校生

時代という多感で無垢な心から、初めて見る外国——人や、風景、そしてその国民性までも感じ取ったことであろう。なかなか経験することの出来ない大きな心の財産だ。

きつと彼らは、このとてつもない財産を胸に社会へと飛び出し、何年、いや、何十年後かも知れないが、世の中へ大きなお返しをすることであろう。

「だつて彼らは湘南高校生であるから！」



## キャプテン水上に捧ぐ

56回生 水戸 将史

「人間50年、下天のうちを比ぶれば」と言われた時代はあった。しかし、齢50にしてこの世を去った彼にしてみれば、やはり短い人生ではなかったろうか。

水上雅樹君は、我々のチームのキャプテンでもあり、名実ともに支柱でもあった。湘南に進学する前の彼と直接話したことはないが、しかし彼は明治中サッ



カー部の名物男としてその名を市内に馳せていたことは確かだった。早熟であったためか、中学校時はがっしりした筋肉質の大柄男で、機関車のごとくグラウンド内を走り回り、ボールを奪えば猪突猛進してゴールに迫る選手として恐れられていたことを覚えている。

そんな彼が鈴木中監督の下にきて、すぐさまAチーム入りして、レギュラーの先輩達と肩を並べて練習に励んでいる姿を我々新入生は羨望のままざしで見つめていたものであった。練習スタートの時の体操でも一番声が大きく、また練習終りのグラウンドランニングもトップで締めくくる、何しろ疲れを知らない男であった。もちろん、中盤を支える大型新人として、自他共に認める存在だったのである。

しかし、そんなエネルギーな彼でも魔の手が差しかかるものだ。どうしたことか、先輩達が引退されていざ我々の出番が来たと言う時に、脚気にかかってしまうのである。我々がグラウンドに出ている時も、仕方なしにゴール裏でつまらなそうに練習を見つめている彼の面影が忘れられない。

その後、フォーメーションの変更があつて、現場復帰した水上君に与えられたポジションはトップ。しかし、彼はその職責をわきまえていたのである、

己の仕事は点を取ることに全神経を集中させていたことは、流石であった。着実に点を入れてくれたし、私の下しくそなセンターリングもジャストミートして、ここ一番という苦しい時に点を稼ぐゴールゲッターはそう探しても見つめることは出来ないだろう。

残念ながら、我々の現役時代はインターハイ予選の途中、格下相手に雨が降りしきる中のぐじゃぐじゃのグラウンド状態で沈む。彼のことだからそのまま居残り、冬の選手権を目指すものも誰もが思っていたが、彼は引退の道を選んだ。

はにかみやで照れ屋の水上キャプテン。うけないギャグを時折り飛ばして失笑を買うこともあったが、そんな人間味の十二分にある彼が今はどういうなれと感じる時、やるせない気持ちはまた増幅してくる。炎天下の夏、もうヘタヘタの我らを叱り飛ばしてくれたタフガイも、結局病魔に倒れてしまったのだ。水上君、君の分まで我々は人生を走り続ける、どうかいつもの笑顔で見守ってくれることを望む。合掌

事務局注・56回水上雅樹さんは、9月25日、49才でご逝去されました。執筆された水戸さんは、民主党神奈川選挙区の参議院議員として活躍されましたが、消費税増税法案に反対し9月に

離党。その後、日本維新の会に入党しました。次回の参議院選挙は7月です。ご注目ください。



## チームドクターとしてサッカーと関わってきた20年間の歩み

—特に湘南ベルマーレの帯同とロンドン五輪男子代表チームの帯同活動を振り返って—

55回生 鈴木 英一

55回生の鈴木英一と申します。現在、横浜市磯子区の県立汐見台病院で整形外科医師として勤務しております。湘

南で鈴木中先生にサッカーの真髄というものを教えて頂いたのち、大学（医学部ですが）でも体育会で続け、社会人となつてからは藤沢市3部リーグで3年間プレー致しました。その後はプレーヤーとしてではなく、チームのメデイカルスタッフとしてサッカーと関わることとなりました。1993年より藤沢市少年選抜（小学6年生）のチームドクター兼コーチ（2002年まで帯同）として帯同したのが始まりです。この時コーチも任されたため、94年に高知の春野で日本協会公認少年少女指導員の講習を5日間受け、今言う公認D級コーチを取得したのは良い思い出です（今は制度が変わり無効と

なっていますが・・・）。1998年には神奈川ゆめ国体少年男子選抜（榑沢龍監督；横浜東高出身）の帯同医を務めました。また1999年からヴァンフォーレ甲府のチームドクターとしてJリーグチームの帯同を始めましたが、途中2001年には54回生OBの我らが藤塚久雄監督率いる神奈川県少年国体選抜のチームドクターとして、宮城国体に帯同させて頂きました。藤塚先輩には当時駆け出しの医師であったにも関わらずスタッフの一員として、私の愚見を尊重して頂いた事大変感謝している次第です。

2003年3月には日本高校選抜チーム（樋口士郎監督；四日市中央工業出身）帯同医の依頼があり、デュッセルドルフ国際ユースサッカー大会（3位）に参加しました。当時山口貴弘、鈴木修人が選抜されていました。後にJリーガーとなり、5年後に再び私が関わることとなります。トリーナメント終了後は帰国せずそのままローマに入り、2004年3月までローマ大学スポーツ外傷学講座に留学致しました。そこでは当時ASローマのメデイカルアドバイザーでもあったマリアーニ教授にお世話になり膝関節鏡手術、膝前十字靭帯再建術を中心としたスポーツ整形外科の手術研修を行いました。また

ASローマのトップチーム（カペッロ監督）に定期的に帯同しスポーツドクターの医学研修を行うことが出来たのは非常に幸運でした。マリアーニ教授は、過去にフアルカン（ローマの鷹、ブラジル代表、元日本代表監督）、アウグイル（ローマ、ブラジル代表DF）の膝半月板手術、エメルソン（レバークーゼン、前十字靭帯再建の手術、トッティの足関節骨折、膝前十字靭帯の手術、カタニーヤの森本の膝前十字靭帯再建などの手術を手がけています。

現在私は、湘南ベルマーレ（2005年より）のチーフドクターとして携わっております。また2009年よりU23ロンドン五輪日本代表帯同医世話人の依頼があり、幾つかの代表の活動に帯同してまいりました。今回Jリーグのチームドクターとしての活動やU23代表帯同医としての経験を踏まえ、印象に残っている幾つかをご報告したいと思います。

ベルマーレの帯同開始は8年前に遡りますが、当時上田栄治監督、菅野将晃（旭高校出身）コーチという指導体制でした。OBの皆さんには御記憶されている方もいらっしゃるかと存じますが、昭和54年の選手権県予選準決勝の三ツ沢で、湘南は菅野さんの一発に沈

みました。そういった御縁もあり、活動当初その思い出話に花が咲き、割と円滑に指導陣に馴染めた思い出があります。菅野さんとはその後2008年まで一緒に仕事をさせて頂きました。今年からノジマステラ神奈川という、なでしこリーグに参入を目標にしたチームが立ち上がり、菅野さんは初代のGM兼監督に就任されています。

チームドクターとしての関わり方ですが、まず週1〜2回の公式戦帯同（ホームとアウェイ）、毎週木曜日に馬人のクラブハウスへ往診にいき、コンディショニングチェック、治療や病状報告を行うのがメインとなります。また検査や手術が必要な怪我が出たときの対応と、その報告もまた重要になります。試合帯同では、試合中や試合後の怪我の判断、治療を行います。主には、打撲や捻挫、脳振盪の判断、裂傷の縫合などの対処となります。また監督への報告では、軽症の肉離れの予後報告の伝え方が難しく、時折問題となることがあります。軽症の肉離れは、選手自身もスタッフも一見プレーが出来そうです。しかし大半は、痛みでパフォーマンスが発揮できなかつたり、悪化したりますので、メディカル側としては慎重になります。レギュラーで重要な選

手ほど、このせめぎ合いは増していきま

す。重度の骨折や靭帯損傷など、手術が必要な明らかに戦列を離れなければならぬ怪我は、あまり議論や問題となることはありません。それでも毎年数件の問題症例が出ており、フロントや監督との折衝で奔走することとなります。因みに、手術は過去8年間でのべ42件を数えました。

それでも2006年に菅野体制となつてからは、11位、6位、5位と地道に順位があがりJ1復帰の基礎が築かれました。2009年には北京五輪で苦杯を舐めた反町康治監督が指揮をとり、データ分析に基づく前への攻撃サッカーで結果を出しました。このときアジェルという天才MFの両下腿疲労骨折治療に難渋しましたが、強力な局所麻酔剤の注射で疼痛コントロールをしながら何とか3分の2の試合に出場、活躍させることが出来ました。水戸での最終戦、0対2からの大逆転勝利でギリギリ3位に滑り込み、10年ぶりのJ1復帰を果たした事は、大変感動的

で最も印象に残る経験でした。しかし翌年のJ1の舞台では戦力を拡充できず最下位に終わり、1年でJ2に戻る

きました。医学的な説明にも耳を傾け、理解力が高いこともあり、トラブルとなつたことは3年間一度もなかったように記憶しております。今シーズンは曹貴哉（チョウ・キジエ）監督に交代しました。彼は、非常に情熱的でクレバーです。しかも育成指導を4年やりトッブチームに入つた経緯があり、若手が育成にかかわつた選手が現在8名在籍）の力を巧みに引き出しました。10月31日現在第3位と大健闘しており、このままで終わればJ1昇格プレーオフを戦う事となります。もしかしたらJ1に再度昇格出来るかもしれません。

U23の活動では、2009年にジャパンズ8（御殿場）、水原国際ユーストーナメント（韓国）、2010年、ツローン国際ユーストーナメント（仏）、2011年、強化合宿3回、五輪アジア最終予選第1戦（鳥栖、対マレーシア戦）と2012年は五輪アジア最終予選最終戦（国立、対パレーン戦）に帯同しました。2009年の水原ユーストーナメントでは、コーチングスタッフ

がA代表のユニットそのままでした。翌2010年、A代表が南アフリカワールドカップで大活躍したことあり、岡田監督が若い選手の指揮をとる姿が身近で見られたことは大変興味深いことでありました。U23の選手へは、「ワー

ルドカップ本大会の決勝トーナメントへはチャンスは必ずあるので絶対に諦めない」「選手一人ひとりが少しずつ向上しようとするのがチーム力を大きくする」「今の年代はサッカーで向上する事だけを考えよ」、など真剣に色々な例を挙げながら説いていたのを今でも鮮明に思い出します。2010年のツローン大会では召集メンバーが戦力的に揃わず、予選3戦全敗に終わり呆気ない大会となってしまいました。ツローンは南米、欧州でも若手の登竜門としての大会となっており、プロチームのスカウトも多数来場し選手のモチベーションも大変高い大会だそうです。日本も最強のチームを送るような方針を採るべきではないか、と部外者ながら思っていました。

2011年になって印象に残っているのは、6月の東京強化合宿最終日にベルマーレと強化試合をやりファンスンミンが鎖骨骨折を受傷した事です。私はU23のチームドクターとしてグラウンドにいたので、受傷時しばらく成り行きを見ていました。ベルマーレのトレーナーが駆け寄り応急処置を施そうとしましたが、痛がって動けない選手を見て、さすがの関塚監督も私の出動を認めました。結局1週間後に、当然ですが私が手術を施行することとなり、

何やら複雑な思いが入り混じった出来事となりました。

公式戦では、アジア最終予選第1戦での清武選手の肉離れ、山村選手の手関節捻挫が苦い経験として記憶に残っています。清武は後半35分に左ハムストリングがつりました。が同時に右内転筋を肉離れていました。結局交代枠を使い切っていたので最後まで出場しました。ただプレーは見た感じ出来ていたので、ベンチからは肉離れしているとは分かりませんでした。試合の翌日、MRI検査後に全治2週の軽度肉離れと診断されると、その夜監督から電話がかかってきて、咎められました。肉離れしているじゃないですか！と。その1週後、彼はACLに出場することとなり患部が悪化、結局A代表合宿も離脱し、復帰まで1ヶ月を要しました。山村は前半に足首を捻りました。一時痛みが強く足を引きずっていたのでピッチを出しましたがすぐに戻り、最後までプレーを離なく続けられました。ところが1週後に自チームの練習で同側の第5中足骨疲労骨折が悪化してしまい、手術を受けました。あとになってから、あれは予選で捻ったからではないのかとの問い合わせが来てしまいました。確かに第5中足骨は腓骨筋腱という腱が付着している関係で、もう少

し端のほうで折れる事はあります。しかしこの骨折は折れる場所が異なり、明らかかな疲労骨折でした。1週間前の受傷が直接の原因と断定するには飛躍のある話であり、非常に対応に苦慮致した事例でした。

とは申しましたが、半年後国立でアジア最終予選最終戦をバーレーンと戦った際、肉離れで悩んだ清武がロンドンで決定付ける2点目を右脚で決めた時には、さすがに感慨深いものがありました。

ロンドン大会出場を決めた後のことになりましたが、2012年4月の強化合宿での出来事です。山口蛍選手がアキレス腱炎で、代表合宿に参加するか、キレス腱炎で、代表合宿に参加するか、ドクターストップをかけるかで、所属チームのドクターと代表帯同医（この時は別のドクターが帯同）が対立した事がありました。そろそろロンドンへ向けて強化する最終段階といったタイミングだったでしょうか。重症度としては非常に軽度で、プレーに影響するレベルではありませんでした。ただ所属チームとしては週末の公式戦に良い状態で出場させたい意向が強く、したがって代表合宿で悪化されては甚だ迷惑だといったスタンスでした。翻って代表監督の立場は、ただでさえ少ない強化練習で、効率をあげたいところをドクタース

トップでもない軽症な選手を合宿から外すのは言語道断だと主張しました。

両者が譲らない状況でした。結局本人がどうしたいのかを監督に聞きだしてもらい、最後まで参加することとなりました。途中、所属チームドクターから医事委員長まで話が上り、私に電話で、いったいどうなっているのか？もめるぐらいならストップさせればいいではないか等の意見を頂きましたが、現場の代表帯同医の判断を尊重することとしました。結局、彼は代表のテストマッチにも出場し、週末のJリーグにも出場することができ事なきを得ました。この一件では、クラブチームのドクター、代表帯同医、代表監督、JFA医学委員長の4者に挟まれ、まさに生き地獄のような状況でした。それでも甲斐あったか、このチームは大きな医学的トラブルもなくロンドンで大活躍をしたのはせめてもの救いであったということでしょうか。

チームドクターは治して当たり前とみられ、一旦頻度の低い合併症が起きたり予想を超える治療経過（無論悪化する事です）となったりするとテンションの高い反応を受ける、地味で緊張感の高い活動ですが、数年に一度ぐらいは優勝や昇格、世界大会出場のような特別な瞬間を経験出来ることがあります。



日々それを夢見て、トレーナーと共に監督や選手と向き合うモチベーションを維持することとなるわけです。

今後私の技術と健康がつづく限り、サッカーとはこのような形で関わっていければ誠に幸せだと考えている次第でございます。



## ペガサス70活動報告

30回生 中原 弘巳

〇―70については、日本協会主催の全国大会である「シニア(70歳以上)サッカーフェスティバル」が16チームの参加で行われています。従来は参加希望チームが少なく、本大会に直接参加が可能でしたが、チーム数の増加により、昨年からのための関東予選会が、さらに今年からは県予選会が実施されるようになりました。残念ながら、ペガサス70は昨年は関東予選で敗退し、今年も県予選でも県代表となることが出来ませんでした。全国的には関東のレベルが高いので、関東予選が壁になっていま

県レベルの大会としては、上記の全

国大会県予選となる「全国シニア神奈川〇―70リーグ」を今年から行っています。今年、ペガサス対その他の神奈川連合チームですが、1敗1分けて敗れました。神奈川シニアリーグについては、〇―70リーグが昨年、ペガサス、イースト、ウエストの3チームで

発足しています。ペガサスは昨年に続いて今年も僅差ですが優勝しました。公式戦の仕組みとして、〇―70も〇―40、〇―60と同じような体制が出来始めたと言えます。

〇―70の特徴は上記以外にも多くの県外での交流会があることです。刈谷大会は〇―60のみの時代から数えて、今年で19回目の開催となります。シニア大会として最も歴史がある大会です。関東、中部、関西のチームが参加しています。ペガサスは当初の湘南OBチーム時代を含めて、第1回大会から連続参加をして来ました。山本修さんは個人としても、実に19回の連続参加です。

福井大会は西日本地域のチームとの、那須の東日本大会は東北地域のチームとの、そして清水大会は関西、中部地域のチームとの交流の場となっています。その他、関東各地で関東チーム同志の交流会があります。埼玉大会ではワールドカップ会場である埼玉スタジアムを使用します。このように素晴ら

しい芝生の上でプレイできるのも、〇―70の特徴です。

日頃の練習の機会として、神奈川の〇―70プレイヤーが集まり、主として平塚の馬入人工芝サッカー場で、定期的に練習会を行っています。毎週火曜日をサッカーを楽しむ日として、ほぼ30〜40名が集まります。

上記の大会や練習会で、平均して月に5日はボールを蹴っていることになりました。試合は4月から11月までの8ヶ月で、28試合でした。戦績は9勝11分け8敗で、丁度イーブンです。残念ながら、最近では戦力が落ちて、全国的にも、中位の実力と思います。

ペガサス70の会員は現在31名ですが、年度内に75歳以上となる人が17名とほぼ半数です。これはペガサスでは高年齢になってもサッカーを続けることが出来ていることで、良いことです。最近では〇―75の仲間での交流会が開かれるようになっていきます。一方〇―70の対戦相手となる他の〇―70チームは70歳前半が主体ですので、試合の勝ち負けとしては厳しい状況になります。若い方々の入会を期待しています。

上述のように、ペガサス〇―70の試合は、全国シニア関連や神奈川シニアリーグの公式戦とその他の交流会に分類出来ます。前者はある程度勝敗に拘

るところがあるとともに、1試合のみの時がありますので、折角参加しても、プレイ時間が短い問題があります。年は取っても、サッカーの質の向上を求めつつ、あまり勝敗には拘らず、健康増進第一とし、怪我をしないで、全員参加で、プレイを楽しむという点からは、問題があるように思います。来年度にかけてさらに〇―70の会員数が増加すると思われれます。会員全員がそれぞれの目的に応じてサッカーを楽しめるように、公式戦目的のチームを編成するのが良いのではないかと考えています。同時に〇―75チームの編成も来年度への課題です。

全員で試合を楽しみながら、勝負にも強い〇―70と〇―75を実現出来ればと思います。



## 「ペガサス65」発足2年目を迎えて

チーム監督 37回生 牧村 英樹

今年、私は「オーバー70」のチームに移籍となりますが、60代よーさようなら！を期に、後に続く方々へのご参考にと、一言書かせて頂きます。

今、改めて60代の10年間を振り返ってみますと、60歳代前半に於いては、50歳代のチームと対戦しても、体力的に大した違和感を感じることはありませんでした。60歳と64歳の前半と65歳と69歳の後半とを比較してみても同じ5年間でありながら、最も失ってはいかない「瞬発力」「走力」「キック力」が、特に67歳と69歳にかけて予測以上の速さで失われていく自分を自覚し、愕然としております。個人格差はあるもののこれが、チーム「オーバー65」に所属する私達の現状ではないかと思えます。

現在60と62歳のチームと試合をするとかやたらと相手に対し「若さ」を感じ、今迄考えることのなかった、彼らには勝てないのではという気持ち先行してしまいます。

ちなみに、関東1都6県で行われております「オーバー65」の昨年の大会での成績は・・・

埼玉深谷大会・千葉市原大会・栃木大会・埼玉熊谷大会・東京大会に参加して、埼玉、千葉、日立、栃木、東京、宮城などのチームと対戦し「6勝1分1敗」と同年代を相手とする場合には、他県の代表を相手にしても相応の結果を出すことができています。

しかし、「オーバー60」の大会に武者修行の積りで参加した結果は

3月の清水の大会 0勝 3敗  
9月の刈谷の大会 0勝 3敗  
と完敗しました。

5年前、10年前は遠くになりましたり・・・が現在の心境です。  
先輩談によれば、70歳と75歳でのギャップは更に大きいとのこと。つまりと

今からは1年1年を大切に楽しみながらサッカーをすることが、最良なんだろうと考える今日この頃です。



## ペガサス60活動報告

42回生 田部井 徹

今年のペガサス60は、昨年のリーグ優勝に味を占め、リーグ戦2連覇と全国大会出場を目標にスタートを切りました。リーグ戦は、昨年の8チームによる前期後期それぞれ総当りの14試合に對し、今年は新たに4チームが加入したため、12チームによる1試合総当り戦に変更となりました。開幕戦から3試合は新規加入チームとの戦いでしたが、2勝1分と順調な滑り出して、9

月の第8戦までは6勝2分、得点18、失点0で、優勝街道まっしぐらとも思える好成績でした。ところが第9戦の宿敵「えぼし」の試合に0対2で負けてから歯車が狂い出し、その後の2試合も不覚を取って星を落とし、終わってみると6勝3敗2分で、優勝どころか3位にも食い込むことができず、4位に甘んじる結果となりました。

また全国シニア県予選も6チームによるリーグ戦で行われましたが、こちらも「えぼし」に敗れ、3勝1敗1分、得点7、失点6で第2位となり、またしても全国大会出場の夢は果たせませんでした。この他、県外大会にも参戦していますが、結果は現時点で12戦して2勝7敗3分と大きく負け越しています。ただ、10月の熊谷大会で久しぶりに東京チームに勝つことが、せめてもの慰めです。今年度残されている公式戦は、県議長杯トーナメント大会のみとなりますが、何とか一矢を報いたいと思っています。

以上のように成績は昨年に比べ今一といったところですが、それに加えて今年の60代のチーム運営は、タイミング的にも一番難しい時期に来ていると思っております。昨年からリーグ戦には毎回20名近くのメンバーが集まり、全員が十分にボールを蹴ることが叶わない状況

にあります。一方、県外大会では徐々に0-65の試合が組まれるようになり、ペガサスも昨年から0-65を立ち上げて参戦していますが、県のリーグ戦と0-65の県外大会が重なると、どうしても戦力が分散することになり、結果として参加メンバーが多すぎても少なすぎても、監督の頭を悩ませてきました。来年もこのような状況が続くと思われまますので、年明け早々には65、60および55の代表者間で、来年度の登録メンバーについて調整する必要が生じています。

さて、来年度こそ本気で全国大会を目指したいと思っております。試合に勝つためには何をすればよいか、答えは他チームの試合展開を観察していれば明白なのですが、頭では分かっているものの通り実行するとなると難しいのが常です。60の試合では、際立った体力は必要とせず、絶えず空いているスペースを上手く使いながら、パスを繋いでボールをゴール前に運ぶことが、結果的に得点に繋がっています。サッカーをやる以上、最低限の体力と基礎技術としての正確なトラップ、パスは欠かせませんが、加えてパスを出すタイミングも大変重要になります。また、強いチームの動きを見ていると、ボールを奪ったら全員攻撃、ボールを奪われたら全員防

御と、攻守の切り替えの速さと組織的なプレーが目につきます。サッカーは、やはり一人の個人技よりもチームワークがものを言うスポーツであり、そのような切り替えの速いチームが、優位性を保ちながらゲームを支配しています。よくよく考えてみると、これらは全て高校時代に習ったことばかりです。

したがって、試合に勝つためには、チームとしての戦術の徹底も重要と想っています。ただ漠然と頑張るだけでは、なかなか勝利に繋がりません。チームとしてどのように戦うか、全員が戦術を理解して実践することも大事です。残されたトーナメント大会には、是非全員で意思統一を図り臨みたいと思っています。



## 湘南ペガサス55の近況

49回生 菅浦 義治

湘南ペガサス55の監督を平成24年度から引き受けました49回の菅浦です。リーグ戦等の惨憺たる戦績はホームページ他でご存じの方も多いと思います。書きたくないという気持ちが大

いこともあり、省略させていただきます。が、ペガサス55は原則55歳以上という年齢的ハンディキャップがもともとあり、それに加え、私の根本的な考え方として参加した人は全員半分以上出場してもらうということが、時には勝敗に影響したかもしれません。しかし、この考え方を来シーズンも変える気持ちはありません。休日に貴重な時間を割いて参加いただけるメンバーに、そんなサッカー好きなメンバーに、少なくとも25分はプレーしていただき、楽しんで、満足して帰宅し、おいしいビールでも飲んでいただきたいです。虫のよい話かもしれませんが、参加した人全員が少なくとも半分出場して、そして試合に勝利できたらと思っています。毎試合メンバーを組んでいます。

また、ペガサス55の人員構成ですが、24年度開始時はメンバー24名中、湘南卒業生が8名と3分の1でした。これはかなり少ない割合であると感じていました。田中君(53回)が同期を2名、水野君(51回)が同期を1名誘っていただき、現在は28名中11名と、4割近くに若干ではありますが増えています。現状の湘南卒業生としては、いつも参加していただける代表の西田さん(47回)、監督の権力を行使して下手なのにスタメンで出ている私菅浦(49回)、多

忙な仕事の合間に参加してくれる同期の元松君(49回)、数年前に復帰し最近プレー勘が戻ってきた水野君(51回)、久しぶりで体力的に不安があったが全国シニア横須賀戦でフル出場した石郷岡君(51回)、ゲームキャプテンを任せている田中君(53回)に加え、不本意にも今シーズン怪我で参加できなかった浅倉さん(45回)、江越君(50回)と、久しぶりに参加しペガサス祭では2得点と大活躍のあと大けがしてしまった新倉君(53回)も来シーズンは復帰してもらえらると思います。そして、秋から参加した柴田君(53回)、先日入会した小松君(51回)も加わりました。今後も湘南出身者が中心となってペガサス55を運営していきたいと思っています。そんなわけで、この文を読んだ50代の湘南卒業生の皆さん、ぜひペガサス55と一緒にプレーしませんか。そして開校100周年のOB戦を私と一緒にピッチに立って迎えませんか。



## ペガサス50活動報告

52回生 八木 啓太

湘南のOB会報なので、湘南卒業生の状況をレポートするのが主旨だと思うが、あえて我々ペガサス50の最大の特徴「湘南卒業生比率の低さのことから書き始めたい。

シニアリーグの登録27名のうち、湘南OBは7名。その上、怪我や転勤もあり、今シーズンはピッチ上で一人か二人というのが常であった。だから、特にゲーム中はチームメンバーにとって湘南高OBチームという感覚はまずない。少しの淋しさはなくてもないが、むしろペガサスというしつかりとした組織を以ってシニアサッカーを楽しむフィールドを同窓という限定的なものにせず、幅広いサッカー好きに開放して取り込み、それを組織活性の一要素にしているところは大らかな湘南の美点、豊かさだと誇りに思う。

湘南OB以外のメンバーは神奈川県内他校の他、出身地は宮城、東京、千葉、京都、大阪、香川、広島など全国各地に及び、インテルミラノさながらである。(ちよつと言い過ぎか、、、)湘南OBで固めたチームも魅力はあるが、色々な好で集まったサッカーや生まれ育ちのバックボーンが異なるメンバーで作るチームも混成の妙とでも言おうか、クラブチームらしくていいもので私の性には合っているようだ。以前、幹事はやつ

ぱり湘南OBがやらなくてはという不文律みたいなものがあつたが、現在は監督と審判担当は他校OBが務めており、今後もチーム運営の中心を「混成」にすることがむしろチームの和に繋がるような気がしている。

ゲームの後、勝ち負けにかかわらずノミネーションで色々な話をする人が多い。ご他聞に漏れず話題はサッカーの昔話になることが大抵であるが、そんな場でも、色々な土地、色々な学校に話題が及んで何とも楽しいし、見聞も広まる。

そんな混成のよさを自認するペガサス50の2012年の状況は、、、

★県議長杯トーナメント(2011シーズン)

準優勝(2/19決勝ペガサス0-2横須賀)

リーグ戦後半から上がってきたチーム力(1・1の強さを基礎にした守備の安定と中盤から前線でポゼッション優位)でリーグ上位チームを無失点で連覇し2度目の決勝進出。決勝ではチャンスは作ったもののチャンピオン横須賀の総合力を破れず

★チャンピオンズカップ(2011シーズン)

※トーナメント準優勝チームとして出場

準優勝(3/18決勝ペガサス0-0横須賀PK2-3)

準決勝は早園と点の取り合いとなるが最後はペガサスの攻撃力が勝り引き離す。決勝は再び横須賀と対戦し、凌いで凌いで0-0に持ち込むが慣れないPK戦で散る。ちなみに相手の奥寺康彦も外しました!

★2012五十雀1部リーグ  
第6位(5勝3分3敗 前年同位)

前半に下位チーム(最終10位・11位)から勝点3を取れなかったことが結果的に痛かった。中盤戦からは主力の負傷欠場などで人数ギリギリが続くも少敵精鋭(?)で粘り強く戦って盛り返し一度は暫定首位に立ったが、終盤、雪辱の好機だった横須賀戦の逆転負けが響き上位食い込みはならなかった。今シーズンのトーナメント1回戦は横須賀。

全国シニア予選(現在4勝1分1敗でブロック暫定2位)でのいい流れを維持し、因縁の対決を制し初優勝で来シーズンに繋げたい。



## ペガサス40活動報告

65回生 石井 隆臣

ペガサスに参加させてもらってからの2シーズン目、2部での優勝をかけた試合を前に執筆している。

もうサッカーから離れて何年経っていただろうか。観戦するのでさえW杯や日本代表戦がたまたま職場仲間と飲み交わしている場で放映されている時くらいで、そこでは当時とはスタイルも戦術も格段に進歩したなあという感想を述べたりして、完全に観衆のひとり。周回でも自分がサッカーをやっていたことすらあまり知らない。

自分のこれまでの人生を前半後半に分けたとすれば前半はサッカー中心で、直近までの後半はまったく別軸であった。

とはいえ、青春時代のサッカー感は何となく自分の思考の基になっていて、後半フェーズでの職場における自分のポジション取りやパフォーマンスなどは、前半のサッカーのノリそのままだったように思う。物事の把握にはグラウンドを鳥瞰するような視点を知ら

ず知らず心がけていたり、人との距離の取り方はフィールドプレーヤー的にバランスを取るともいうべきであったりする。

業務においてもここではオフエンシブに・・・とか、彼にはディフェンシブな機能を果たしてもらおう・・・とか、思わずそう表現しそうになる。

そういった点ではサッカーの戦術的な思考は途絶えていなかったのかもしれないが、身体は着実に重くなり、走れなくなり、健康のために運動してくださいーと保健指導をうける後半を過ごしてきたので、またボールを蹴ることになるとは思ってもみなかった。

ソーシャルメディアによって当時の仲間や諸先輩方と次々と繋がってしまったのが事の始まりで、ありがたいことに熱心に勧誘していただき、またリアルにサッカーをやることになったのだ。相当のブランクを経て、自分では予期しなかったサッカーキャリアの延長戦が始まったのだ。

ろくに身体が動かないながらも参加させてもらった一昨年の1シーズン目は苦しみながらも、運を味方につけて得失点差での3部優勝を果たすことができた。

さらに今シーズンは現時点で2部の優勝争いの中に居させてもらって



て、幸せな限りである。

試合に向けて高まる緊張感。勝てば文句なしの優勝なのだが、引き分け・負けでは3位という上位3チームがひしめく中で、ライバル2チームは全試合消化済み。ペガサスの最終戦はまさに自力で優勝を掴む瞬間を皆に見せる為

に用意されたような舞台だ。  
幸い相手チームは優勝・降格というモチベーション外のチームだ。いつものように仲間と声掛け合って、力を合わせて、挫けないで走り続ければ必ず勝利できるはずだ。

いつも通りのプレーができるだろうか・・・、万が一先取点を獲られたら慌てずに戦えるのだろうか・・・と不安要素で頭いっぱいメンバーもいるかもしれない。ああでもないこうでもない試合展開をいろいろイメージしたり、自分のゴール場面を想定したりしている者もいるだろう。

いつも通りでいいはずなのだが、この最終戦での結果が、一年間戦ってきたことの集大成となる事、負けると（無になるわけではないのだが）優勝を逃すだけでなく、努力が泡と消える気がしてしまうような気がする事からなんだか落ち着かない。

しかし、こんなドキドキするシチュエーションはとても貴重なわけで、そう

そう味わえる緊張感ではないのだからよく噛み締めておかなくては勿体ない。

限られた時間の中でコンディションを整え、とても熱くプレーする面々。時にフィールドプレーヤーよりもうるさいと指摘されそうなりザーブの選手たち。この一体感のなかで勝利を味わう事ができるよう尽力したい。ところで突如開始された私のこの延長戦はいつたい何分ハーフなんだろうか・・・。



## 現役・OB会とともに強く (トトカルチヨ湘南活動報告)

82回生 篠塚 貴志

200人ものOBが出席された鈴木中先生の喜寿を祝う会（11月上旬）にて、鈴木先生と共に歩む湘南高校サッカー部・OB会の歴史を目の当たりにしたからでしょうか。トトカルチヨ湘南の現役生・OB会への関わり方について見直し、現役生・トトカルチヨ湘南の継続的強化とOB会の維持発展のお手伝いをできれば、などと考えております。会報で本文を読む頃には自分が大変生意気であることに気付けるかどうか・・・。

若手OBチーム、トトカルチヨ湘南

の篠塚（82回）です。湘南高校サッカー部OBの皆様、平素より大変お世話になっております。今年度はトトカルチヨのメンバーの多くがご指導頂いた清水好郎先生が定年を迎えられ、鈴木先生の喜寿と合わせて湘南高校サッカー部の御祝事が重なっております。私自身にとつては現役生のコーチとして最後の年であり、湘南高校サッカー部との関わりも節目の年となります。現役3年間と合わせて9年、湘南高校サッカー部に育てて頂いたご恩を少しでもお返ししなければならぬと思いつつ、トトカルチヨ湘南の活動に思い悩む日々を過ごしております。

昨年度にチーム解散寸前まで追い込まれたトトカルチヨ湘南も今年度は徐々に立て直しが進んでおります。昨年度はメンバー不足の試合が多々ありましたが、今年度は87回生2名の追加や81回以前のOBの継続的参加により、常に12、13人を揃えて試合ができております。戦績は6戦終わって4勝1敗1分（リーグ2位）で、残り2試合に勝つと神奈川県リーグ2部への昇格戦に進出できます。10月以降は攻守のバランスを欠き1勝1敗1分と不安定な試合が続いていますが、湘南高校らしく粘り強く戦うことを忘れずに2

部復帰を目指します。

今年度は、毎週練習を実施できるようにグラウンド・体育館の確保に努めておりますが、参加者が集まらず練習が中止になることも多い状態です。練習不足で戦術の共通理解や連携が確保されぬまま試合に臨んだ結果不安定な試合が続いていることから、チームとしての練習の場を確保する重要性を強く感じております。私自身、取り纏めとしての役割を十分に達成できずチームのメンバーに迷惑をかけてばかりですが、小林先生にご指導を頂いた新しいメンバーと、清水先生にご指導頂いた長年トトでプレーするメンバーの懸け橋となり、安定して勝てるチームになるように尽力させて頂きたいと思っております。

また、昨年度も書かせて頂きましたが、トトカルチヨ湘南の継続的強化にはトトカルチヨ自身が現役生の強化に貢献し、OB会の活動に積極的に参加することが必要不可欠だと感じております。具体的には、大学生のメンバーによる現役生指導、夏・冬のOB会や他の休日における現役生との試合、及びOB会総会への参加等を行えるように努力するところから始めるべきかと考えております。

人数が少なく苦しい面もございます



が、継続的に強いトトカルチヨ湘南を目指すために「湘南高校の血筋」は絶やすべきではなく、「湘南高校サッカー部のつながりの中でサッカーをしたい」という気持ちを持つ選手の加入を期待しつつ、現役生・OB会と共に長く強く安定したチームとなるように引き続き努力いたします。トトカルチヨ湘南は若手OBの皆様の参加を歓迎しておりますので、若手OBの皆様には是非とも篠塚やトトに加入しているメンバーにお声掛けを頂き、練習・試合へのご参加を頂けると幸いです。よろしくお願いたします。

現役生・OB会とともに、強いトトカルチヨ湘南で在ることを目指し、2部・1部へと昇格することを目標に引き続き精一杯頑張らせて頂きたいと思えます。今後ともご指導のほどよろしくお願いたします。

## 報告

監督 小林 周太郎

今年度も多方面にわたるご支援を頂きましたことを御礼申し上げます。

今年度のチームは、昨年の主力選手が半数以上残り、公式戦、練習試合で、安定した成績を残してきました。U18のK2リーグ戦では、九戦全勝、無失点での一位となり、関係各方面からの賞賛をいただきました。しかし、トナメント戦では、昨年に続き、ベスト8決めの試合で全て負けるという結果となってしまいました。これで2年間、6大会連続でベスト8決めでの敗退。

しかも今年は全てが延長かPKでの敗戦と、OBの皆様には期待をいただきながら、なかなか突き抜けられず申し訳ございませんでした。関東予選では、残り1分までリードしながら、失点し、PKも先に止めながら負けるという内容の試合で落とし、総体予選では桐蔭学園を後半に半面で押し込みながら、決定機を逃し、延長で足が止まって敗戦。選手権予選でも、前後半での決定機を逃し、延長後半に失点を重ね敗退しました。

ただ、今年も3年生32名が一丸となって夏を越え、10月まで戦い抜くことができました。現在のサッカー部は選手権までやり抜くことが当たり前となっています。そして、後輩のためにもここから必死で勉強して目標の進路に進む姿を見せようとしてくれています。サッカーだけで部活動は完結してはいけな

いと考えているので、この3年生の姿勢を大変うれしく思っています。

さて、「練習試合なんか百戦百敗でもトナメントで8連勝すれば神奈川の代表になれる。練習試合でたくさん勝つて、本番に負けるのでは強いチームではない。」ということを選手によく話をします。強豪校やJユース、大学生や社会人など、有名なチームとの練習試合での対戦に舞い上がったり、内容を度外視した勝負をする試合をすることは、対戦慣れもあつてなくなりました。結果として勝つことも多くあるので自信になることもあると思います。ただ選手は、練習試合と本番でそれらのチームが出す結果と自分達には差があることを痛感していると思います。チームの力が高まっているからこそ感じられる差で、本心に悔しいと感じる差でもあります。この差を乗り越えられるかが、湘南復活への鍵だと考えています。

決められるときに決められたかどうか、決めてきた選手なのか。そして、際どい勝負を何度もくり抜く、勝利してきた経験があるかどうか。プリンスリーグ・KSリーグで戦うチームとの対戦で、その部分での差を埋められなかった1年でした。

ただ、来年度以降も上位で安定してサッカーをする力はあると思えます。

## 現役報告

すので、常に今年度以上の位置で試合をして、代表になりたいと思います。新チームも昨年同様にシードのため新人戦は戦わないで、4月の関東予選が初の公式戦となります。リーグもK1リーグ昇格となりますので今年の差を埋めて春以降を迎えるべく走ります。今後ともご支援・ご協力をお願いいたします。

山崎 康太

この度、主将になりました山崎康太です。OB会の皆様のご心強いご支援のもと、日々の活動が送れること、大変感謝しております。支えていただいている方々への感謝の気持ちを忘れず、これからも全国制覇という目標に向かって、努力していきたいと思えます。

10月21日に向上高校に敗れ、3年生の引退が決まり、6大会連続ベスト8の壁に阻まれるという結果になりました。まずはこの新チームでその壁を破り、そして頂上へ駆け上がって行きたいと思っております。

今、新チームでは新たにボールポゼッションに取り組んでいます。これまで、強豪校を相手には相手にボールを保持される時間帯が続く展開になっていましたが、自分たちもボールを保持し、主導権を握ることを目指しています。まずは関東大会までの約半年間で限界までその力を高めていきたいと思っています。

さて、今年は去年のK2リーグで1位になったことにより、K1リーグでの戦いとなります。格下のチームが多かった去年までと違い、同格、または格上のチームとの試合になります。そのような力関係の試合を1年間、いいグラウンドでできるのはチームにとってプラスになると考えています。

今までの、湘南らしさであった守備の質は落とさずに、さらに磨きをかけ、さらなる守備の安定を目指します。また、課題であった攻撃をボールポゼッションを身に付けることで解消し、得点の取れるチームになりたいと思います。

部員一同、小林先生のご指導の下、高い目標に向かって一歩一歩進んでいきたいと思えます。そして、今年は何となく結果を手にしたと思います。これからも応援のほどよろしくお願いいたします。

## 高校サッカーの1年間

48回生 中関 佳史

高校サッカーの新チームは、選手権予選で破れたところから始まる。一次予選で負ければ7月、二次予選は9、10、11月に行われる。もちろん並行して下の学年の練習、試合は行っているが、レギュラーがそろわなければチームづくりは始まらない。

新人戦は大きく変わり、実質的には春の関東大会への出場権とシード決めの大会となった。KS以上と選手権の3回戦以上(実質ベスト16)のチームは、新人戦に出場しない。これ以下のチームは11月から12月で予選リーグを行う。湘南地区は15校が参加。予選リーグを勝ち抜くと1月に地区決勝トーナメントでシードを決める。湘南は、H23年度は選手権3回戦進出で、新人戦には参加しないでシードされた。

こうなると新チームは、4月の関東大会で初めての公式戦に臨むことになる。これでは、12月から3月までのチーム作りが難しい。湘南の場合、総体でチームの切り替えを標準としてきた

が、最近では、3年が全員、選手権まで残るということになってきている。受験校ならではの悩みかもしれない。新人戦がないと、1年からレギュラーは別にして、3年でレギュラーになったら、すぐ関東大会、総体で、2ヶ月で自分のチームが終わるというのもさみしい気がする。

関東大会は、参加資格のある96校が、4月から予選を行い6チームに絞られる。これとKS10チームの計16チームでトーナメントを行う。8チームで、5月に二次予選を行い、2チームが関東大会に進出する。関東大会にはプリンスリーグ勢は参加しない。神奈川県では桐蔭、桐光がプリンスリーグ1部。H24年度、湘南は第3シードで下の96校からの戦い。4連勝したが5試合目で藤沢清流にPKで敗れ、ベスト16。代表は藤沢清流と三浦学苑。

高校総体は全チームが参加できる。神奈川県は約200校。プリンス2校と関東大会ベスト16校はシードで二次予選の28校からスタート。残りの10ヶの枠を目指して約180校が一次予選を4月末から5月末までで行う。6月上旬から、28校での二次予選を開始。6月末までに終了し2チームが全国大会に進む。湘南は、関東ベスト16の第5シードで二次予選から参加。日大を

延長で、2-0で破ったが、桐蔭学園に延長の末0-2で負けてベスト16。県の代表は桐蔭学園を破った三浦学苑と桐光学園の2校。三浦学苑は総体全国で優勝。昨年の桐蔭学園に続き、神奈川県勢が2連覇した。

選手権は全チームが参加できる。二次予選は35チーム参加で、総体ベスト16とKS3チームの計19チームがシード。残りの16の枠を目指して、約180校が参加して7月に予選が行われた。ここで敗れると通常は新チームになる。湘南は総体ベスト16の第4シードで二次予選から参加する。

以下今後

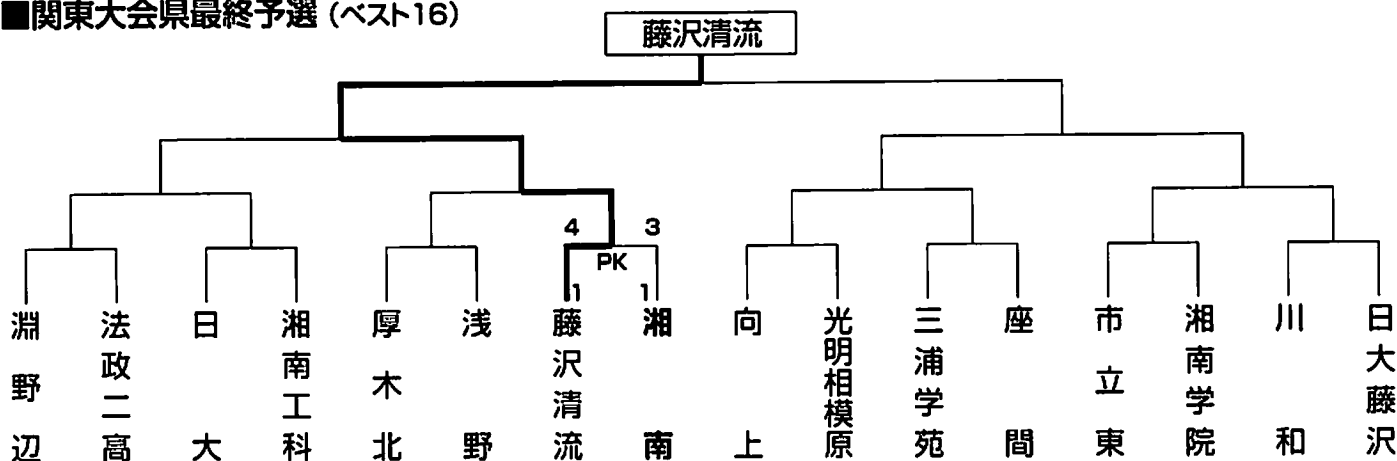
この他、同等のチームレベルの試合を増やすという方針の元、U18リーグが実施されている。これには、高校とJリーグなどクラブチームが参加。全国のトップはプレミアリーグで東西にわかれて実施。その下がプリンスリーグで関東は1部、2部にわかれる。桐蔭、桐光、マリノス、フロンターレはプリンス関東の1部。ベルマーレとFC横浜が関東2部。この下に神奈川県県リーグがある。上からKSが1部10チーム、K1が2部各10チームで計20チーム、K2が4部各10チームで計40チーム。K3は18部で実施している。各校2チームまでエントリー可能。4月から10月

に試合を行うが、各レベルで大会の空き日程を調整して行っている。リーグの所属は前年までの成績で決まる。湘南はK2のAグループに属しているが、今年は、KS1位の日大に勝ち、KS2位の藤沢清流にPKで負けという風で、当該年のチームの実力とは異なる場合もある。K1の三浦学苑が高校総体で優勝した例もあり、トーナメントとU18リーグの所属、成績は一致しない場合もある。

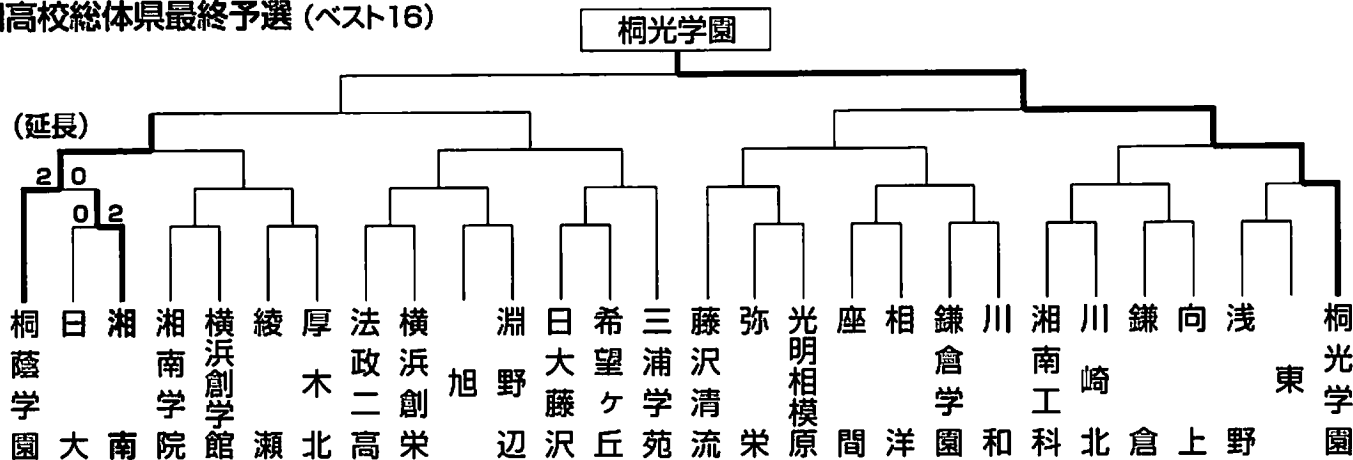
国体も変わった。少年の部はU16、高校1年と中学3年の世代から選抜される。以前のように、選手権の予選と国体で過密日程をこなすことはなくなった。国体は大半がJリーグの下部組織の選手から選抜される。

神奈川県は2008年、2009年に国体優勝。総体では2011年に桐蔭学園、2012年に三浦学苑が全国優勝を遂げた。いまは全国的にも高いレベルにあり、かつ、上の8-10チームはどこが代表になってもおかしくない実力があるといえそうだ。

■関東大会県最終予選 (ベスト16)



■高校総体県最終予選 (ベスト16)



■全国高校選手権大会県二次予選 (ベスト16)

